



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中国都市近郊農村における高齢者の自立度と在宅介護：蘇南農村を対象に〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	王，鄢
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(農学)
Dissertation Number	甲第14605号
Issue Date	2021-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/82299
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	wang_yan_review.pdf, 審査の要旨



学 位 論 文 審 査 の 要 旨

博士の専攻分野の名称：博士（農学）

氏名 王 鄢^{えん}

審査担当者	主 査	教 授	坂 爪 浩 史
	副 査	教 授	近 藤 巧
	副 査	名誉教授	坂 下 明 彦
	副 査	准教授	小 林 国 之（食資源）

学 位 論 文 題 名

中国都市近郊農村における高齢者の自立度と在宅介護 —蘇南農村を対象に—

本論文は序章、終章を加え6章からなり、図7、表40、文献75を含む、総頁数99の和文論文である。別に1編の参考論文が添えられている。

中国の農村部では、急速な高齢化や核家族化の進行によって高齢者を家族が支えるという「老親扶養」のあり方が問題となっている。それを補完する施設サービスも対象者が限定されており、農村高齢者の扶養に関する社会的なシステムの形成が求められている。そのなかで、老親扶養を基本としながら、社会的支援である「在宅介護サービス」を受けるシステムが注目されている。

しかし、従来の研究においては制度設計やその普及に関する研究が主であり、サービスを受ける高齢者の実態を踏まえた研究はほとんど存在しない。そこで、本論文においては支援を受ける側の農村高齢者の生活実態とその自立度により支援ニーズを分析し、その上で支援をする側の老親扶養と在宅介護サービスの意義と問題点を把握し、両者の関係から農村部の在宅介護の課題を明らかにしている。

対象としているのは蘇南農村であり、沿海地域で経済発展も著しいことから、全国に先立って農村部での在宅介護サービスが普及している。しかも、農家の兼業化により若年層の流出が少なく三世代世帯が維持されており、従来の老親扶養に在宅介護を加えるという農村高齢者扶養のあり方を探る条件を有している。

以上の課題を整理した序章に続き、4つの章がおかれている。

第一章「分断的な高齢者福祉事業の展開」では、農村での高齢者福祉政策の現状を示している。計画経済期から継承された二元的な社会構造のもとで、現在の社会保障ならびに高齢者福祉は都市部が農村部に対し優位である。高齢者扶養は法的にも家族の責任とされ、その補完として企業を主体とする福祉市場の拡大が政策化されているが、農村にはそれにアクセスする経済的基盤がない。また、公営の施設サービスは救貧的で利用が制限されており、家族による老親扶養と一部で実施されている在宅介護への依存が実態であるとしている。

第二章「A村における高齢者の生活と老親扶養の性格」では、蘇南農村の実態調査をもとに、高齢者の年齢の進行による区分に対応した老親扶養の性格を明らかにしている。高齢前期では逆に子世代へのサポートが積極的に行われ、サポートが始まるのは高齢中期であり、生活面と精神面が中心である。そして、家族による本格的な介護は高齢後期に集中

している。しかし、環境の変化により、老親扶養が困難となる傾向も指摘されている。

第三章「高齢者の自立度低下による主要ニーズの変化」では、80 歳以上の後期高齢者およそ 120 名を対象として、ADL（日常生活動作）の機能的自立度評価法（FIM）等により高齢者の属性と自立度の評価を行っている。これにより、自立度に対応した高齢者への支援内容を明らかにし、次章の前提としている。

第四章「蘇南農村における訪問型在宅介護サービスの実態と課題」では、訪問型在宅介護サービスの評価を行っている。その利用度には、健康、要支援、要介護という自立度段階により相違があり、要支援高齢者では定型的なサービスでの利用度が高く内容が適合的であった。しかし、健康な高齢者と要介護高齢者の利用率は低く、前者では医療保健サービスが、後者では専門的な介護サービスを求めている。しかし、ホームヘルパーの専門知識が乏しく、ニーズの段階的相違に対応できないことが指摘されている。

終章では、各章の要約を行ったうえで、総合的考察を行っている。高齢者の生活は、その自立段階に応じて大きく異なり、高齢初期にはむしろ子供を支え、中期には経済面では問題がないため、生活面と精神面で支援を受けている。問題は高齢後期であり、要支援から要介護へと移行することで家族に負担がかかる。こうした老親扶養の段階は、これまでは三世代家族内のライフステージの変化として受容されてきたものである。しかし、少子化、核家族化による親子の別居、扶養意識の変化などにより、従来の老親扶養の機能は弱体化しつつある。特に高齢後期での全面的介護期間が長期化すると、老親扶養のみでは限界が現れ、社会的支援が求められる。この老親扶養を補完するものとして蘇南農村では訪問型在宅介護サービスが実施されている。その内容は家事援助と生活介助が中心であり、高齢中期、すなわち要支援の高齢者において利用度が高い。しかし、特に高齢後期の要介護高齢者が必要とする専門的な介護サービスには対応できておらず、その支援体制の構築は必須である。これは、出稼ぎなどで要介護高齢者が置き去りにされている中国内陸部ではさらに緊急を要する。この解決のための法整備、資金調達、介護人材の育成確保という制度面の改善が必要であるとしている。

以上のように、本論文は高齢者の自立度という従来等閑視されてきたサービスの前提条件を克明な実態把握により示し、自立度に対応したサービスのあり方から在宅介護の現状とその改善方向を明らかにしている。これは高齢者問題が深刻となっている中国の農村問題に対する具体的な問題提起となっている。よって、審査員一同は、王 鄢が博士（農学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認めた。